

新年度を迎えて

一般社団法人 日本オーディオ協会

会長 校條 亮治

日本オーディオ協会は、昨年 60 周年を迎え、「記念式典」や「音展」での記念ミュージアム「音の歴史館」開催、「記念 CD」、「記念誌」の制作発行など、多くの記念イベント開催と共に 60 周年を無事に終えることができました。これもひとえに会員、並びにご関係者の皆様のお蔭と心から感謝をし、厚く御礼を申し上げます。本来ならば直接お伺いし御礼を申し上げねばならないところですがこの紙面をお借りし、重ねまして厚く御礼を申し上げます。

さて、今年度から新たなスタートを切ることになりますが、諸先輩方が築かれた歴史に傷をつけることなく、日本オーディオ協会として新たな活動を重ねることが出来れば幸いと存じます。そこで、新年度を迎え、今後の活動と将来展望について、浅学ではありますが少し考察を加え、会員の皆様のご意見を頂き、協会活動と会員の皆様のご活躍の一助になれば幸いです。

先ず、将来展望を述べる前に当協会の原点を今一度紐解いてみたいと思います。創立に至った井深大氏の逸話は、既に多くの方々を知り得るところですが、それでは設立主意である「可聴音・高忠実度録音及び再生の飽くなき追及」については如何ほど浸透し、達成できたのであろうかを問わねばなりません。技術的には SP 時代からすれば圧倒的な進化を遂げたといえます。録音及び再生技術も、それらを支える機器類とそれを構成する部品・部材もオーディオ協会設立時と比べるべくもありません。そしてデジタル技術の到来により、当初のアナログからデジタル化による危惧をよそに、今やどこでもそれなりの再生音楽に浸れるようになりました。また、小型化技術により、さらにそれは驚異的に進みました。一方で、このことは本当に協会設立主意に則ったものとなったのでしょうか。機器自身やデジタル化、及びそれらを基本とした伝送技術の進化は認めることができますが、私たち試聴者を含む最終形に至るまでを考察したときは、いまだ道半ばといわざるを得ません。逆に設立主意にある崇高な理念からは遠ざかっているようにも見えます。

実は設立主意を深く考察すると、その奥にある真の狙いは「再生音楽文化すなわちオーディオ文化を広め、楽しさと人間性のあふれた社会を創造する」ことではなかったのかと想うことしきりです。これは私が着任早々、事務局の皆さんと「協会のビジョンとは何か」を議論したときに導き出された結論であり、今や定款の前文となっていますが、その後、井深氏の考えや行動軌跡を、幾つかの文献や同時期の諸先輩の方々から見聞きするにつれ、実は日本オーディオ協会の設立趣旨の究極の意味はこれだと強く思うようになりました。そうであるとするならば先ほど述べたように、道半ばどころか遠ざかっているといわれても、あながち間違っていないといえます。

具体的に指摘すれば、第一にオーディオ文化そのものが変質してきていることが挙げられます。私たちは、オーディオ文化とは、音楽等の録音再生に当たり、飽くなき高忠実度による録音再生を目指していますが、高忠実度より、利便性や形のデザイン性が追及されるようになり、音は二の次と成り下がってしまいました。この結果、大画面薄型テレビにおける音は、貧弱どころかスピーカーの取り付け位置さえ確保できず、まともな設計とは言えない状況となってしまいました。

さらに、携帯音楽プレーヤーの出現により、これまた音質の観点や、音像定位についても全く顧みない状況となり、まさに「悪貨は良貨を駆逐する」の例え通りになりました。私は、新たな生活スタイルや技術革新を否定しているのではなく、どのような状況に置いても、そのステージごとに飽くなき高忠実度録音と再生を追及することを忘れてはならないことを言っているにすぎません。第二に、これらの結果から本当に楽しさと人間性のあふれた社会を想像できたのかと問われた時、自虐的にならざるを得ません。確かに誰でも、どこでも音楽を聴くことが出来、また作ることも出来るようになり、楽しさは倍増したといえます。しかし、人間性のあふれた社会になったかは大いなる疑問です。再生音楽にだけその責任を押し付けるつもりはありませんが、本来、音楽は生活を潤し、人間そのものを豊かにするはずですが、残念ながら音楽使い捨て時代においては難しいと言わざるを得ません。このような状況下における将来展望ですが、決して安楽な道程とは思えませんが協会設立主意に沿って、新しい活動を構築する必要があります。昨年は「中期事業計画」を策定しましたが、節目の新年度を迎えるに際し、「中期事業計画」の進捗検証と共に、今一度設立主意の真の狙いを具現化すべく活動を開始したいと考えます。

第一は、啓発活動の強化です。何といたっても子供たちから若い人たちが良質な音・音楽に触れる機会は極めて少なくなっていると考えます。最も感性を磨くべき時期である小・中学校での音楽の時間は週1時間にもなりません。このような状況で大人になっても感動創造など起きようがありません。具体的には感動を誘発する音楽再生とは何かを求め、そのような経験がない、あるいは気が付いていない人々に対する啓発活動の強化が必要であると考えます。ここではまず感動を誘発する音楽再生を掘り下げねばなりません。例えば、聴いたことがない音楽、聴いたことがない音場空間での音・音楽、聴いたことがないクオリティーでの音・音楽、ヘッドホンオーディオの音をコンポオーディオ並に替える方法、ミニコンの音を高級オーディオ並に替える方法など、今、あなたが聴いている音より良い音を聞いてもらう場づくりにより、多くの人々に経験してもらうことが重要と考えます。また、音楽そのものを語り、良い音楽に触れる機会を多く創ることが必要です。

第二は、啓発活動に対するバックボーンとなる技術的な知見と論理構築が重要と考えます。今まで協会は、技術的な課題に対してはあまり精力を費やしてこなかったといえます。あるいはしないことが暗黙知として共有されて来たのではないかと考えます。それは技術的課題が各会員企業に帰属するために手を付けにくかったことと、JEITAなど所管団体の活動が機能していたからと考えます。しかし、前述の如き、大画面薄型テレビや地デジ化における、音声信号の扱いを見るに及び、捨て置ける状況ではないと認識します。これでは井深さんの遺志に反するといえます。そこで前期より設置した技術部会、放送・通信等新音源検討委員会の活動強化、及び今期よりネットワークオーディオ委員会がJEITAより移管され、新たな活動を開始します。技術に裏打ちされ、ユーザー視点に立った提起や啓発活動の強化をしていくつもりです。当然ながら、諸官庁等への意見表明などに対しても技術的な視点が欠かせません。より良いオーディオ再生環境の整備に向け新たな活動を開始いたします。会員諸氏のご意見をお待ちいたしますと共に、オーディオ復権に向け絶大なるご支援をお願いいたします。